

しょうれん 力障連「わ」会 報

http://challenged-catholic.net/ No.103 2024.12.3 発行

もくじ 目次

かんとうげん か 巻頭言に代えて 「ともあゆ」の待降節やシノダリティ	
しょうれん こもんしきょう ささ かい かいちょう まえだ まんよう すうききょう 力障連 顧問司教・支える会 会長 前田 万葉 枢機卿	1
だい かいにほん しょうがいしゃれんらくきょうぎかいながさきぜんこくたいかい ふ かい 第14回日本カトリック障害者連絡協議会会長崎全国大会を振り返って	
しょうれんながさきぜんこくたいかいじっごういんかい 力障連長崎全国大会実行委員会	2

かんとうげん か 巻頭言に代えて

たいこうせつ 「ともあゆ」の待降節や シノダリティ

しょうれん こもんしきょう ささ かい
力障連 顧問司教・支える会

かいちょう まえだ まんよう すうききょう
会長 前田 万葉 枢機卿

十 キリストの平和

しわす どうじ たいこうせつ むか みな
師走と同時に待降節を迎えましたが、皆さまにはご清祥の事とお慶び申し上げます。そして、まだ早いですが、クリスマスと新年おめでとうございます。

にほん しょうがいしゃれんらくきょうぎかい しょう
日本カトリック障害者連絡協議会（力障連）の顧問司教として、また同会を支える会の会長として、日ごろからご理解、ご支援をいただきましたこと、心から感謝申し上げます。

しょうれん ねんきょうと せつりつたいかい かいさい
力障連は1982年京都で設立大会を開催し、以降3年に1度皆様のご支援ご協力をいただきながら、各地で全国大会を開催してまいりました。ところが、2021年開催予定の

ながさきたいかい ねん か
長崎大会が、2020年からのコロナ禍のため2年延びて、昨年・2023年10月14日と15日に盛大に行われました。長崎の皆様はじめ全国の関係者のご支援とご協力のたまものがあります。「ともに…つんのうで！」のテーマは、長崎らしさとシノダリティを良く表したものでした。

きょうこう ことし びょうしゃ ひ
教皇フランシスコは、今年の病者の日のメッセージで「わたしたちは独りであるためではなく、ともにいるために創造されたのです。そして、この交わりの計画が人間の心の奥底に刻まれているからこそ、捨て置かれる経験、孤独になる経験を恐れるのであり、それをつらく、非人間的とすら思うのです。重い病によって気弱になり、先の見えない不安な時期には、その傾向はいつそう強くなります。たとえばCovid-19のパンデミック下で無残にも孤独を味わった人たちが思い浮かびます。」と言っています。

やまい 皆さん いたいのは、
また、「病にある皆さんに言いたいのは、寄り添いや優しさを求める気持ちを恥じないでほしいということです。隠さないでいいのです。人の負担になっているなどと思わない

てください。病にある状況というのは、慌ただしい生活のペースを緩め、自分自身を見つめ直すよう、だれをも招くのです。病者、弱っている人、貧しい人は教会の中心であり、わたしたちが人間らしい関心を注ぎ、司牧的配慮を払う第一の相手でなければなりません。それを忘れてはなりません。祈りの中で、とりわけ感謝の祭儀の中で、主イエスが与えてくださる相互愛をもって、孤独と孤立の傷をいやしましょう。こうして協力して、個人主義の文化、無関心の文化、使い捨て文化に抗い、優しさの文化とあわれみの文化を広げていきましょう。」とも言っているのです。

イエスのいつくしみに倣いつつ、新たな熱意をもって病者・障害者やそれを世話する人々のために祈り、シノドス（ともに歩む）ことにいたしましょう。

昨年も当「支える会」に90万円近い支援金をいただきましたことを心から感謝申し上げます。障害者も健常者も、ともに「つんのうで」天国への道を歩むことができますように、今年も全国の信徒をはじめ小教区、修道会、学校・幼稚園、施設・団体関係者の皆さまにご寄付をお願いしたいと思います。当機関誌「わ」には、支える会の振込用紙は同封しませんが、下記振込先に振り込んで頂ければ幸いです。

振り込み先：郵便局振替
口座番号：00830-6-45785
加入者名：カ障連を支える会



以下の記事は昨年の長崎大会の参加者に送られてきました報告書です。参加できなかった皆様にも共有させて頂ければと思い掲載致します。

第14回日本カトリック障害者連絡協議会

ながさきぜんこくたいかい ふ かえ 長崎全国大会を振り返って

カ障連長崎全国大会実行委員会

2023年10月14日（土）、15日（日）の2日間、長崎純心大学において第14回カトリック障害者連絡協議会長崎全国大会を実施しました。この大会の開催に際し、長崎教区長・中村大司教をはじめとする各司祭並びに信徒の皆様からのご協力が得られましたこと、まず感謝を申し上げます。合わせて、大会運営に尽力くださったボランティアの皆様、準備段階より尽力くださった実行委員の皆様にも感謝いたします。

長崎で行う初めての開催であり、「坂の町」と揶揄されるような障害者には優しくない町での開催計画は決して簡単なものではありませんでしたが、参加者から喜びの声が上がる大会になったのも皆様のご尽力の賜物だと思います。ここで大会準備から振り返ってみたいと思います。

2018年10月に行われた横浜全国大会終了時に次回開催地は長崎教区であることが発表されました。当初の計画では3年後の2021年に開催される予定でした。2019年には準備委員会を立ち上げ、順当にいけば2020年に実行委員会を組織して大会の準備に臨むはずでした。しかし皆さんがご存じのとおり、新型コロナウイルスの世界的な流行により、大会の準備どころか、社会活動そのものが制限さ

れる事態となりました。結果、長崎大会の開催はコロナの流行や社会活動の動きを見守りながら開催の延期を決断するに至りました。延期期間中は人が集まること自体が難しい環境でしたので会議の開催には至らず、しかしコロナ禍において急速に普及したりリモート環境下で責任者クラスの会議は継続することが出来ました。しかしそこで様々なことを決定してしまうと、ただ大会を行うといった当初から懸念していた大会が打ち上げ花火のようなものになってしまうことは明らかで、やはり各福祉団体職員や障害者当事者の意見を反映する必要がありました。そんな煮え切らない、もどかしい期間を過ごしていましたが、2022年5月に全国力障連役員会において2023年度の開催に踏み切るといった決定がありました。そこから実質1年ちょっとで大会にこぎつける必要がありましたが、とにかく開催するということが決まったのです。

通常は約3年間で準備していくものを約1年間という短い期間で準備するというかなりハードルが高いものになってしまった感じがあったことは否めませんが、とにかく急ピッチで進める必要がありました。それから急遽リモートではありましたが準備委員会を再開し、それまで滞っていた長崎教区における力障連長崎支部の立ち上げにも着手しました。この力障連長崎支部の立ち上げにも様々な障害が立ち塞がりました。障害者の情報を得ようとアンケートの実施などをしましたが、現在社会において個人情報保護の流れが強くなり、そのアンケート自体実施することが出来ないところもありました。結果、教区内に広く周知をすることが出来なかったことが大いに悔やまれるところです。もっとほかの手段を講じて広く周知することが出来ればと感じています。しかしそれでもアンケー

ト段階において協力してくれる・興味があるといった声が約60名から聞くことが出来ました。その方々の中から最終的に約30名の方が2022年10月に立ち上がった力障連長崎支部に参加してくれました。当初からかかわってくれている準備委員会のメンバーとこの力障連長崎支部のメンバーで大会実行委員会を立ち上げ、行っていくことになりました。

実行委員会が立ち上がったのは2022年11月と大会まで1年を切っているところでした。そこから開催までこぎつけるには容易ではありませんでしたが、幸い大規模な大会開催に携わった経験がある方も何人かいて、その方々を中心に準備を進めました。しかしその内容というものは決して順調に進んできたものではありませんでした。まず、まだコロナ禍の状況だったので会議はリモートが中心でなかなか全員の意思疎通が困難であったことが1つの問題点に挙げられます。約5つの会場をリモートでつなぎ会議を行っていると、個人的に発言することが難しくなり、結果深い議論は行われないうちに物事が進んでしまっていたという状況が生まれてきました。この問題に気づけたのはコロナ禍からwithコロナと社会の風潮が変わっていった2023年の5月以降、やっと一堂に介しての会議が出来始めた頃でした。しかしこのころになるとまた1から話し合っただけで今まで決まっていたことをやり直すというような時間の余裕はありませんでした。とにかく10月の大会開催にこぎつけるという一心で進んでいました。しかしここで大きな問題が一つ起きていたことに気づいていませんでした。もともとこの大会は長崎教区内における障害者への意識の変化をもたらすきっかけとして位置づけられていたものですが、このころから大会の成功というものが最大の目標となっていま

した。もちろん大会が良いものになることに
何の問題もありませんが、それがその後につ
ながるものになる必要がありました。そのこ
とについて少し用意が足りなくなっていたこ
とを大会終了後になってようやく気付きまし
た。そういうこともありながらでしたが、大
会に向けて急速に準備を進めていきました。
今回の大会準備にあたって改めて気づかさ
れた点をいくつか挙げていきたいと思いま
す。まず教区での行事開催において、準備段
階での参加者をもっと幅広く集めるべきだっ
たという点です。障害者の大会ということで
福祉団体やその関係者に絞って会議参加者を
選別しましたが、広く教区へ周知するには、
例えば各地区から会議に参加してもらい、話
し合われたことを周知してもらうなどといっ
た方法を用いていけば、今回のような周知の
漏れ・遅れなどは防げたものと思います。カ
シラ連の全国大会が長崎において開催されるの
が初めてでしたので言い訳になるかもしれま
せんが、そのあたりの考え方が不足していた
ことが悔やまれます。次に大会ボランティア
に関する考え方の違いでした。大会を運営す
るにあたって多数のボランティアが必要にな
ります。その協力も教区内信徒にお願いしま
した。しかしこれについても考え方の相違が
あることに気づきました。当初募集に関して
は本人の意思で声を上げてもらうと考えてい
ましたが、実際この方法は難しいというこ
と、また致命的なことは参加方法などの情報
の拡散が遅れたことで、参加の意思があっ
てもどうやっていいのかわからないという人々
を生んでしまいました。最終的には地区また
は小教区にこの作業に対するボランティアを
何人お願いしますという従来通りの方法とな
りました。切羽詰まった状態をお願いしまし
たがすぐに対応していただいたことに感謝し

ています。地区・小教区における組織がしっ
かりしているので当初からこの方法をとって
いけば、参加するボランティアともしっかりとコミ
ュニケーションが取れて、大会においてボラ
ンティアの運営もスムーズにいったのだろう
と、このことについても悔やまれるところで
した。全体を通して言えることは、やはり
情報の拡散・周知がちゃんとなされていれば
もっとスムーズに事が進んでいたのだろうと
いうところです。このことについては今後
に生かされて行かなければいけないところ
でしょう。

次に教区にお願いした協力金についてです
が、こちらのついてもわかりづらいという
意見をたくさんいただきました。カシラ連長崎
のことも今後も記憶にとどめてもらえるよ
う、グッズを販売してなおかつその利益を
大会運営費として考えて準備してきました
が、全国カシラ連の役員より、宗教法人として
販売して利益を上げるというのが会計上難し
いのではないかと指摘をいただきました。
そこで信徒から「協力金」という形でお
金をいただき、その「返礼品」としてグッズ
を手渡すという、一見するとわかりづら
いですがそのような方式をとることとなり
ました。こちらの方もその経緯などの情報
が拡散されなかったために多くの戸惑い
を生んだようです。それでも実行委員会の
人員の奮闘や信徒のご協力もあり、ある
程度集まりましたが、最終的には各地区へ
再度お願いをして目標金額に届いた感
じでした。情報の拡散に関しては実行委員
会のメンバーで、各地区・小教区評議
会へ出向き、またミサの後などに話を
させていただきましたが、やはり拡散す
るといった意味ではそれだけでは足りな
かったように感じます。また始める時期
が遅かったということも否定できません。
このことに

ついても今後の課題として残していきたいとおもいます。

様々な問題もありましたが、それ以上に大きな協力をいただき大会は成功に終わったものと考えています。参加者からは「とても良かった」「今までで一番良いものだった」などといった肯定的な声を多くいただいております。確かに委員会内部やボランティアからは不満の声もありましたが、やはり大会に参加された方々が良いと思ってくれるならば、それが一番良いことだと思います。しかし何度も言っている通りこの大会は長崎教区における障害者との関りを考えていくきっかけとして考えています。

今回集まったカ障連長崎支部のメンバー以外のところでも障害を持った方々が自分たちでもグループを作ろうといった動きも出てきています。そうした動きが今後活発化され、大会が打ち上げ花火とならぬよう、テーマであった「ともに…つんのうで！」を实践していけるよう動いていく必要があると考えています。

最後にもう一度、今大会を開催するにあたりご協力いただいたすべての人に感謝いたします。また今後のカ障連長崎や障害者の活動にご理解と更なるご協力をいただけるとこの上ない幸いです。

ぶんかかい 分科会 1

きょうかい しょうがいしゃ 「教会が障害者とかかわっていき くにはどうすればいいだろう」 ファシリテーター 紙崎 新一 師

①シノドスとインクルーシブのつながり→
もにあゆむということ。同じ目線になって、
同じ立場になっていくということが重要。

②自分の小教区 障害者・高齢者はどれくらいいるのか、また各教会におけるバリアフリーはどのようになっているか？

③障害者が教会に来られない訳とは？
信者からの口出しが悪口に、それがたとえ悪気がなくても悪口に聞こえる。

意見) ある教会での出来事として、一人の信者がその日具合が悪く、スロープではないが機械で上がるものを利用していたところ、別の信者から「あんたが乗ったら壊れるだろ」と言われたことがある。

④御ミサに参加するとき、障害者を意識したことがあるか。

意見) 主人が障害者で免疫が弱く、コロナの時は人の多い所に連れて行かないように病院側から言われていたが、ご聖体をいただきたいということで教会に連れていったとき、教会に来ていた人達が車まで車椅子を持ってきてくれて、こういった親切な方々も教会にはいる。

意見) 聴覚障害者の告解において、司祭が筆談ではなく手話での応答ができないのかということ。

意見) ある教会の神父様は障害者を気にかけているようには見えない。ご聖体はいつも忘れられ、声をかけられることもない。障害者の気持ちを考えて寄り添ってほしい。

⑤教会とは何か。

意見) バスやタクシーといった教会までの交通の便がなく、また教会まで1時間以上かかる人もいる。また、雨が降ったとき行くことも難しくなるといったように、トイレやスロープの問題だけではない。

意見) 地域のバリアフリーが成り立っていないと、外での移動も難しく、地域全体で(障害者への)意識付けをしなければ意味

がない。

⑥これからの教会に対して、こうあってほしい、あるいは自分がこうありたいという意見があるか。

意見) 司祭・教会役員・信者同士がお互いに声をかけあって、キリストの共同体として成長していくこと。物としてのバリアフリーがあっても心のバリアフリーがコロナ禍もあってか、足りない。

ぶんかかい 分科会2

「『誰ひとりとり残さない』社会 を実現するためには」 ファシリテーター 田中 実

①人と人とのつながりの希薄、顔がすれ違ってても挨拶もできないような雰囲気。その中で高齢者や障害者が地域とのつながりを作っていくためにはどのようにしたらよいか。顔の見える関係を作っていくと知らない人には支援の手がまわりづらい現実がある。

例) 地域のコミュニティを活用して人々が集まる場や交流の場を提供する。

例) 地域のイベントやワークショップ、ボランティア活動などに参加する。

例) 共通の趣味や関心事を持つ人が集まるグループ・クラブに参加する。

例) ITやSNSを活用してオンラインコミュニティに参加する。

例) 新しい人々との出会いの場で積極的にコミュニケーションをとる。しかし、自分だけでなく他の人の障害も分かりづらいうちでのコミュニケーションを図ることは難しい。

意見) 地域の活動に積極的に参加して、「私

はここにいるよ」という姿を現すことが大事だと考える。

意見) 自分の子供が幼稚園での初聖体の準備で、幼稚園が終わってから信者の子供だけで初聖体の勉強があった。初聖体の1週間前には他の子供たちは衣装合わせしている中で自分の子供はしなかった。幼稚園のシスターからは清められていないパンを用いてお家で練習するように言われたが出来ず、その時のことがショックで教会から離れようと考えたが、上の子が教会学校に積極的に参加し、自分も教会から離れられず、また心あらずの状態でも御ミサに与ることが多くあった。しかし、長年そのような状態で考える内に教会でないといけないと考えるようになった。

意見) グループホームの夜勤の時の出来事で、その時に震度4の地震があった。2階の利用者は眠剤を飲んでいるので、なかなか起きない。そこで地域の人の手を借りる機会があったが、その後もそういった出来事をきっかけに話をするようになっていった。顔見知りということだけでも何かあったとき助けてくださる。

→顔の見える関係を作っていく必要性。

意見) 教会で皆さんが安心して御ミサに参加できる、そのような教会づくりを進めていけないといけない。地域も大事だが、基本は教会からだと考える。

意見) 障害を持っている小さな子は、他の小学生と一緒に心がデリケートなところがあり、小さいときの関わり方は難しいと感じる。

意見) 障害の当事者の中でも様々な障害があって、障害者同士が差別することもある。お互いの理解を得る、知ることが大切である。

「すべてを包み込む社会の 実現 (ハンセン病)」

ファシリテーター 浜崎 眞実 師



①ハンセン病とハンセン病問題の違い、疾病の問題と病の問題は別である。ハンセン病問題は病の問題、病とは文化的社会的規範から逸脱しているとみられている状態で、差別を受けているということ。病気には病気そのものの苦しみとそれ以外の苦しみがあり、ハンセン病問題が今、国民的な課題となっている。ハンセン病問題に関わる当事者は、ハンセン病にかかった人それだけでなく、治った人またその家族も差別の対象となった。

意見) ハンセン病に限らず、差別そのものは人間が存在する限り、無くならないものと考えられる。その差別を少なくするか、あるいは小さくするか、出来る限りのことをやっていく必要性。

②障害が個人にあるのではなく社会にある。社会は障害者に配慮が足りないから配慮していくということではなく、配慮が不平等な社会となっている。

「新型コロナによって どんな変化が」

ファシリテーター 中川 賀雅

意見) みんなと会うことができない。

意見) ニュースなどでコロナという言葉が何度も報道されていった中で神経質となり

恐怖を感じながらの生活を味わった。

意見) インターネットの活用が増えたこと(人によって良し悪しあり)。

意見) 食事会など今までされてきたものを断ることができる一方、病院や施設での面会が厳しくなったこと。

意見) LINEなどでの連絡が頻繁になって、連絡が楽になった。また教会のライブ配信は助かった。

意見) コロナが流行していた時、人と人との距離感だけでなく、挨拶の仕方や対面での会話でもどのようにしたらよいか戸惑いがあつた。

意見) マスクを着けることによって顔を見ることができない。

意見) 御ミサにあずかりたくても行けなかった。また、高齢者を中心として元気でもコロナが心配で教会に行くことが出来ない人もいる。

意見) 第5類になってから多くの人の元気な顔が見ることができてよかった。

意見) コロナが始まったときは65歳以上の方は御ミサに参加しないようにと言われ、3年経って参加すると多くの人の顔が老け込んでいた。

意見) 教会でも地域でも会話をなくすことが、人の元気をなくすことにつながっている。

意見) 教会を含めた地域や社会で、コロナによって弱っていった人たちと関わり、できることは何かと考えることが必要。

「みんなが同じ生活を営むには どうすればよいだろう(合理的 配慮障害者差別解消法)」

ファシリテーター 牛 轟彦

①障害者差別解消法ができるまで
国連において2006年12月13日に障害者
権利条約が採択された。採択された理由は、
障害のある人が当たり前の権利を持って
いないためとしている。日本も2007年9
月に署名。2009年12月に障害者制度改革
推進本部が設置された。そこでの会議にお
いて差別禁止部会が設置され、2013年6
月障害者差別解消法が制定された。

意見) 障害者差別解消法は、「禁止」ではな
く「解消」となっていることに違和感を持
っている。

②それぞれの障害の機能的部分ではなく、そ
の障害の代替を見つけることによって障害
は解消されていく。そのために必要なこと
が「合理的配慮」(例：お店に段差があり、
車いすだと入店できない→スロープやエレ
ベーターをつける)。

意見) 車いす生活は不便だけど不幸ではない。
その人を取り巻く環境が言いたいことを言
える、やりたいことができるものであるな
らば。

意見) 車いすの方が段差を乗り越えることが
できないときに、周りの人が助けないと
差別になるというお話だったが、助ける人
にも負担はかかり、また差別になるという
ことなら、同時にリスクも出てきてしまう。
→助ける人にも様々な人(体力がある人も
いればない人もいる)がいるので個人間の

ことは任意の問題であるが、事業者は別で
ある。たとえばお店の入口に段差があると
したとき、健常者には良いが車いすで入店
はできず、そのときにスロープを設置する
か、店側がお手伝いをする。これが合理的
配慮であり、それをしないことが差別であ
る。

意見) 合理的配慮は一律に決まった内容では
なく、お互いに話し合っ決めていくプロ
セスである。そのことによって障害という
社会的なバリアが解消されていくことを
目指す。

意見) それぞれの地域における社会、会社や
学校、教会や行政においても合理的配慮が
不十分であるかもしれない。解決するため
に色々な人たちに訴えていき、解決する
手段を考えていく必要がある。

「ともに喜び、分かち合う」

ファシリテーター 永瀬 安郎

1. インクルーシブな社会とは、すべての人
がお互いを尊重しあい、受け入れて、とも
に支えあう社会のこと。

誰ひとり取り残さないためには、
信徒同士がともに歩むこと。ともに信仰を
分かち合っ、支えあい、喜びや希望を
共有し、励ましあって、そこから生じる
他者への愛が多くの人への愛につながって
いく。

そのために気づきが必要である。障害者
の方しか気づかないこと、健常者が気づく
こと。「気づき」というのは自分がしてほ
しいこと。また人にすること。気づかない
と何も起こらず、何も変わらない。

2. 分かち合いのためのアプローチ

『ルカによる福音書18.35-43エリコの近くで盲人をいやす』の分かち合いの前に読まれたもの)

- ① 信仰者は神の愛と受容を感じることで、神との関係を築くことができます。
- ② そのためには、聖書の考えを学び、キリストとの人格的な交わりが不可欠です。
- ③ さらに、社会的弱者や障害者への支援活動、人々のニーズに寄り添うことで、神の愛の実現を感じることが出来ます。
- ④ それにはすべての人々が気づくことが大切です。
- ⑤ 信仰者は信仰によって人生の困難に直面してむかう力を得ることができ、神の愛と希望を感じることで、いやしや希望の源を見出すことができる。
- ⑥ 心を静かにして神の存在を感じることで、信仰の進化や喜びを見続けることができます。
- ⑦ 聖書の考えを学び、解釈することで、信仰の基盤を固めることができ、聖書のメッセージを生活に適用することで、信仰の喜びを実現することができます。

- ### 3. それぞれのキーワード『誰一人取り残さない』、『キリスト者にとって信仰の喜びとは何か』、『どうすれば信仰を見出せるのか』、『はたして信仰の喜びは必要なのか』に関する分かち合い
- それぞれ考えは違うけれども、考えを求めていくことが信仰を追及していくことにつながる。



ぶんかかい 分科会7

よ 「善いサマリア人の 心をも共に考える」

ファシリテーター 竹谷 誠 師

ルカによる福音書10.25-37「善いサマリア人」より。

1. 用語の説明

- ① 律法の専門家…ユダヤ教の法律の専門家
- ② 祭司…カトリックの神父様たちみたいなもの

- ③ レビ人…ユダヤ教の典礼に詳しい人達
- ④ サマリア人…出エジプト記において、モーセという人がエジプトの圧政に苦しんでいたイスラエルの民をパレスチナに戻した。その後、ユダヤの人たちは国を作ったが分裂し、北部がイスラエル王国、南部がユダ王国となった。イスラエル王国はアッシリア人に攻め込まれ、様々な宗教や風習を持ち込まれてしまう。そのため、イスラエルの民はアッシリア人や他の民族と結婚し、混血になった。同時に、モーセがかつて言っていた教えから離れてしまっていた。この人たちの末裔がサマリア人である。当時は宗教を捨てて混血になったサマリア人とユダヤ人の対立の構図を誰もが分かっている中で、イエス様のたとえ話があった。

- ### 2. 人種的・民族的な壁があったサマリア人とユダヤ人。その壁はどのようなものか。また、その壁を乗り越えるためにはどうすればよいか。サマリア人に見る助けるとは何か。あるいは何が助けることを妨げているか。弱者という見方、考え方は正しいのか。今の私たちにとって隣人とは誰か、あるいは隣人愛とは何か。どのような社会に

なれば隣人愛のある社会となるのか。
 意見) 困った人に近づくことができること。
 私たちが自然に持っている壁をどれくらい
 壊すことができるのか。イエス様の言われ
 る隣人愛を生きるために自分自身が他の
 困っている人に近づくかなければならない。
 同時に当時の祭司は、神に司る人として清
 さを保たなければならなかった。傷のある
 人に近づくことと汚れてしまう、その意味で
 法律上の問題として近づくことができな
 かった。だからこそ「法律」という壁が大き
 くあったと考える。

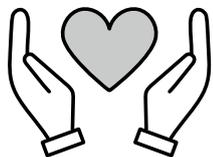
意見) イエス様は祭司にもレビ人にも、「行
 って、あなたも同じようにしなさい」と言
 われていると思うから、教会もそうあるべ
 き。色々な条件がある、壁がある、それが
 あっても壊しなさいという言葉なら教会も
 そうあるべき。

意見) 病気や障害は神様が試練として与えて
 くれていると考える。

意見) すぐ近くにいる人に寄り添うことが、
 サマリア人の教に一番近いのではないかと
 考える。

意見) 教会の司祭だけでなく、一人ひとりの
 内側にある深い壁を考える必要がある。人
 は自分がかわいいもの、傷つけられたくな
 い、今集中していることに熱中したい、そ
 のような時に邪魔されたら怒り、自分に閉
 じこもってしまうという所からどう抜け出
 ていくか。

意見) 難民のための募金などそのようなこと
 はできても、隣の方が困っているから募金
 をするとなると、考えてしまう。



ぶんかかい
 分科会 8

「シノダリティの教会」

はなふさりゅういちろう し
 ファシリテーター 英 隆 一 朗 師

1. シノダリティの教会に大切なもの

① 交わり…どのようにして私たちが交わりを
 もって生きていけばよいのか。障害のある
 人を排除する様々な現実的・文化的障害が
 世界中の教会から広く報告されている。こ
 れを克服するために、障害者と健常者がい
 かに本当の交わりをもつ教会をつくってい
 けるか。

② 宣教…宣教をどのようにして私たちがとも
 に行っていくのか。障害者も共同責任をも
 つ宣教ができるかどうか。障害者は助けら
 れる存在ということだけでなく、健常者と
 障害者が力を合わせて宣教できる形はどう
 なのか。

③ 参加…教会の活動をやっていくうえで
 障害者が意思決定に参加できるかどうか。

2. シノドスのやり方 (霊における対話)

神様に心を開いて分かち合いをしながら、
 神様が私たちに何を呼びかけているの
 かを聴く。

→ 教会活動に参加されるとき、障害者と
 健常者との関係のなかで、良かったことと
 良くなかったことの分かち合い (※一人ひ
 とり順番に発表)

① 良かったこと

- 教会での手話ミサがあること。
- 障害のある方でも侍者の奉仕をしている
 ことがある。
- 教会の信徒が優しく、また信徒同士で力
 を合わせて障害を持つ方のサポートも行
 っている。

- ・コロナの影響で御ミサのYoutube配信があり、カトリックに興味のある方も含め、視覚障害者の方も観られたこと。

②良くなかったこと

- ・手話に関心のある人が増えてほしい。
 - ・ろうあ者の信徒が多いが司祭が手話をできないため教会に行けない。
 - ・(人から聞いた話として) 健常者の価値観で奉仕を頑張りすぎる共同体がある。例として、知的障害を持たれている方が聖歌隊に参加したいと言ったが、音がずれるから声を出さないと言われることがあった。
 - ・とある教会での障害への理解が浅いこと。発達障害の方を奇異な目で見たり、マナーを理解していない人として捉えている。
 - ・最後は神父様が決めるよと言って、教会の参加する場、決定する場に信徒がいない。
 - ・健常者と聴覚障害者との合同の入門講座において、健常者だけだと話のスピードが早く、障害者の人が来て手話通訳が行われるが、健常者のペースで行われ、聴覚障害者の人の理解が遅れる。聴覚障害者と健常者との合同勉強会は難しい。
- ### 3. 2の分かち合いを経た意見
- ・障害をもっているから障害者ではなく、どんな人でも障害をもっているという視点からみんなを見て、みんなが困っていることを解決していくことが大切なのではないか。
 - ・障害者とまではいかない人(軽度の発達障害や、障害でなくても心に葛藤を抱えている人)に関して、教会内において信徒も自分も理解を深める必要があ

る。

- ・インクルーシブとか皆が参加できる御ミサとか、そこにこだわり過ぎると逆に追い詰める形となりきつくなる。時と場合によっては、障害者と健常者を分けて行うようなことも必要になるのかもしれない。たとえば、御ミサにおいても皆で参加したい人もいれば、同じ障害の人だけでやりたいという意見があるときなど。一番大事なことはその人が安心して来られるような居場所を作ることではないか。

ぶんかい 分科会10

「フリートーク」

ファシリテーター 下原 和希 師

1. 他の人の生活を聞いて、私たち一人ひとりの生活を見つめ直す。

※ファシリテーターの生活を話す。

2. 二つのニュースに関して

①鉄道の障害者割引のルールに関して

2023年3月18日からJR東日本・PASMOを導入している鉄道やバス会社で、障害者用ICカードの発行が開始になった。これまで障害者割引を受けるためには障害者手帳を駅員に提示する必要があった。しかし、それも介護者同伴が条件となっており、障害者一人での利用の場合には割引の対象外となる鉄道が多い(ただし、片道の営業キロが100キロを超える場合はべつ)。

②2016年相模原市でおきた障害者施設殺傷事件について

2016年に相模原市にある知的障害者施設 津久井やまゆり園で起きた19人の

殺傷事件。植松死刑囚は施設の元職員。重度の障害者である八木さんとの対話において、意思疎通が取れているかどうかで人間かを見極めていて、そのことを「差別ではなく区別である」と言い、続けて「差別は偏見にもとづく、区別とは違う、意思疎通が取れない人は有害だから」と答えている。

ぶんかかい 分科会12

「TOGETHER WE キャンペーン『ケアの共同体』の実践に向けて(カリタスジャパン)」

ファシリテーター 瀬戸 高志 師

わかちあい

①私たちの共同体・教会はケアの共同体となっているのでしょうか。

②なっていないとしたら、何が不足していると思いますか。どうしたらケアの共同体になれるのでしょうか。

(以下は①を中心とした分かち合い)

意見) 小教区の中でケアの心が大事だということが際立っていないという実感がある。教会の福祉委員会として情報を提供したり分かち合いを広げたり活動していく中で、教会の中心となっている人たちの理解は得られても協力は得られない。まずは自分たちから変わる努力をしている。

意見) ケアというのは与える、相手のことを気に掛けるということ。教会は共同体であるがケアの場が薄く、組織になってしまう。そういった意味で価値観がない。

意見) 行政機関は宗教・政治団体に直接協力してはいけませんが、住んでいる人に支援を届けるという意味では、カトリック教会を

とお 通して、行政と教会のケアの共同体も考えられる。

意見) 健常者の方が考える手を差し伸べるラインと、障害があつてここまでは支援が必要だというライン、この差をどのように埋めていくか。

意見) 場所によっては教会から遠く離れて暮らしている地域もある。その人たちにとって教会でのケアの共同体というより、地域での共同体としてある中で、教会は週に一度あるという状態では教会でのケアの共同体は難しいと感じる。

意見) 講演の中で「障害者は見えなくされている」という話があつたが、障害者だけに

限らず生きづらさを抱えている人は、周りの人が苦手なこととしてどうしても距離を置いてしまい、なかなか一緒にできない。

そのような中でケア共同体とはどうしたらよいのか。

意見) (健常者の立場として) ケアと聞いてもどう関わっていけばいいのかわからない。自分にできることを見つけることができればよいと思う。

(以下は②を中心とした分かち合い)

意見) 一人の先生が言うには、障害という言葉を使うのではなく、「特別な手立てを必要とする人」、「特別な手立てを必要とする時」、「特別な手立てを必要とする場所」など。障害者という概念を辞めるべき。

意見) 社会福祉などの大会でよく「特別な時に」 「特別な配慮が必要な方」という言葉が使われるが、ケアとは配慮であり「手立て」という言葉はとても良いと思った。

意見) ケアは助けることよりも関係を作ること(皆が離れた中でそばにいたり)を優先することがカトリック教會的。

※第6分科会：オリーブの会、第9分科会：

いろいろコロナカフェについては独自の企画で
行っているの資料としては掲載していません。

参加者の声

- 一人も取り残さないという思いを大切に生きていきたいと思えます。自分の代わりに障害を背負ってらっしゃると自分に言い聞かせ、その思いを胸にとともに生きていけたらと思えます。障害者の保護者の方の声が身に沁みました。
- 目指すところや大切なことは一つですが、そこに至る道・答えは一つではないと痛感しました。
- 分科会に参加して九州の教会のバリアフリー度の低さに驚いたのと同時に自身の障害者への関心度の低さに気づかされました。今後は意識して教会内に限らず障害者とかかわっていただけると考えています。
- 初めての参加でしたが皆さんの意見・質問など活発に出ていてよかったです。分科会でほかの教会の状況を知ることが出来たので自身の教会の状況を再確認したいと思えます。
- 関係性の表現について考えさせられました。また障害という表現の言い換えとして「特別な手立てが必要」という表現は新しい発見です。
- 信者の皆さんがコロナ禍において大変悩まされていました。
- 災害などの時は近所同士の助け合いが必要。社会生活においていろいろなところへ参加しておいた方が良くと思えた。
- 「しょうがい」とは「しょう外」であり、外に出て発信していくこと、外の人に伝えること。

- 東先生の体験によるお話、当事者の気持ち
を質問で聞くことが出来て、改めて考えさせられ、教会でつながる大切さを味わいました。なかなかお会いできないカリタスジャパンの人たちともお会いできて感謝しています。
- 今回の大会に出席して、神父様・教会役員様たちのご苦勞を心から感謝申し上げます。いつもお世話してくださっているのに今回の心遣いには孫とともに感激でした。
- いろいろな意見を聞いて、私の思っていることと同じ意見が多かった。
- 差別はどこからきてどこへ向かうのか？生きづらさの中で、いかに生きてよかったですと思える社会を目指していきたい。
- 私に通っている教会では高齢化が進み、聴覚障害を持っている人が教会へ来なくなり、手話通訳者も高齢でやめる人が相次ぎ手話ミサが行われなくなった。コロナ禍以前でもこの状況なので、コロナ流行後においても教会に来る信者が減少した。
- 基調講演も大事かもしれませんが分科会の時間が足りなくて残念。障害者は全部ではありませんが、なかなか外の人たちのかかわりが少ないので分科会で自身の言いたいことがとても長くなってしまっているので自由な話し合いの場がありがたい。
- 沢山の方に支えられている力障連。今私たち家族も支えてもらっている方々を思い出しましたが、中でも枢機卿様をはじめ神父様方本当に感謝申し上げます。公的な支援の中でしか動けない私たち家族にとって、会のボランティアの方々がいらっしゃりうらやましい限りです。
- ライブ配信におけるライブ字幕の意見が参考に became 。

○限られた時間の中で自分たちが教会で感じたこと、また日々の生活の中で社会に感じるなど意見を聞くことが出来てよかったです。

○私は今のところ健常者ですが、各地の教会でコロナ禍に障害者も健常者も大変な思いをされていたことを知りました。どんな時にも信仰が支えになっていることを感じました。

○差別をなくすためにどうすればいいのか？褒めているつもりでも差別につながっていることに気づいていないときがある。「社会構造の差別」という言葉がすごく心に響いた。

○同じ悩みがあることが分かりました。

○教会のバリアフリーは進んでいるところ・いないところがあるが、心のバリアフリー(障害者に対する接し方)はあまり進んでいない気がした。

○自分の周りのいろいろな困難を抱えている方がそれにめげず、努力され、また楽しくなるように他人を尊敬しておられることをお聞きして共に手を取り合って助け合うことが大事だと新たな気持ちになりました。

○様々な方の話が聞いて勉強になりました。

○皆でポッチャをしてとても楽しかったです。また皆で仲良く笑いながら楽しくできたらと思いました。

○知らない方とポッチャを通して自然に仲良くなれました。

○ハンセン病について。ハンセン病(疾病・

疾患)とハンセン病問題についてよくわかるように説明していただいて理解できました。障害を持っている方に対しての「差別」。この問題についても難しい課題でした。これからも共存できる方法を考えていかなければと思いました。

○教区によって教会施設内のレベルの違い、考え方の違いが分かったこと。「隣人を愛せよ」との教えの実践の難しさが分かったこと。しかしそこにとどまらずに希望をもって歩むことの大切さ。

○それぞれの教会でのコロナ禍での状況、現在の状況を知り勉強になった。

○障害者が教会の中で隠されているという話題から、手話ミサを始めたなら聴覚障害のある信徒がいたことに気づいた、というエピソードを聞き、まさに「なせばなる」であると思いました。

○ユダヤ人とサマリア人と間にある壁を乗り越えた良きサマリア人の話で具体的な壁とは社会的・宗教的なきまり(律法)、役割などがある。この壁を乗り越えることを考えるとき、われわれは自分がどのように誰かの隣人になるかを考えるが、誰かが自分の隣人になってくれるという視点を持つことも大事だと気づかされました。

○「場」があることの重要性

○誰ひとり取り残さない社会・教会とは、難しいことではありますがそれぞれ置かれた場所で人との関係性を高めて声をかけてつながり育てていく必要があります。

○オリーブの会に参加させていただき、一生懸命生きておられる姿に接して自分の生き方を方向転換できました。

○シノドス、仕事として障害福祉についてですが、制度や法律の中では何かと克服できないことが多くあります。



- いろいろな方がいろいろな思いを抱いていて共通の思いも大いにあるんだなと思いました。
- 何に困っているか聞いてみて、不自由さを少しずつみんなの話題にしていこうと思っただ。異質な人を受け入れる多様性を持つと思う。
- 自分が変わること。障害者も非障害者もお互いを知ること。
- 障害を持っている方が普通の暮らしをすることへ向けて法が制定されたり努力しながら社会へ向けて存在をアピールするなどの可能性を知ることが出来た。
- カ障連の活動に無関心だったこと、少しずつ祈りとともに考えたいと思います。この大会に参加したいと背中を押してくださったのは、きっと神様だと思います。
- 差別にあっても、仲間・協力者を増やしていくこと。
- 伝え合うことの大切さを改めて実感しました。
- 実行委員会の皆様ありがとうございました。会場は坂が多く車いすの方や障害者の方たちは大変でしたが、ボランティアの皆さんのおかげで助かりました。
- 基調講演 制度や名簿があっても障害者は災害から取り残されてしまう。官的平等感から特性への理解が得られないといったところに今の日本の問題点があると拝聴しました。皆自分で精いっぱいになってしまう状況の中でも障害を持つ方の生きる権利、情報をどう保証するか、教会内外を問わず大きな課題があると感じました。
- 新しい知人が得られた。
- 自分の存在を堂々と人々の中で示す。または反対の立場の人は言いやすい雰囲気、環境を作る。
- 障害者の方の前向きな姿勢に感動した。

- 人と人との繋がりが希薄になっている。希薄な社会の中で人との繋がりを作っていくにはどうしたらよいか。障害者や高齢者が様々な人々と交流する機会を創造すること。顔の見える関係を作らないと支援は受けられないというお話はもっともだと思います。障害者に対する差別・偏見がある世の中に自分の存在を示していくのはとても勇気がいりますね。
- よくわかってくれる方と仲間を作り、お互いに人を大事にすることがともに生きる基本になると思った。特に精神障害のようにはわかりにくい方々はこれが必要である。
- 「何も感じなくさせる」多剤大量処方を受けた世代の方々の実体験を伺うことが出来てうれしかった。
- 障害者への配慮が足りなかったので大会でそのことをわからせていただいた。この大会で得たことを生かしていきたい。
- 分科会にて皆様との分かち合いが心に響き、楽しい良き分かち合いが出来たこと。また数人の方との出会いがあり、これから同じ仲間として交わりを深めていきたい。そしてみんなと一緒に神様の愛をいただき、幸せを求めていきたい。
- 偶然はない、神の摂理とおっしゃっていたことを感じた分科会で、人と人との繋がりが、病が奇跡的に神によって癒され健康に向かっている人との出会い、神の愛を感じたひと時でした。神から命を新たに頂き、心も刷新して神の御心になれた働きが出来ますように。祈りのうちに福音宣教していきたいと力をいただいたひと時、ファシリテーターの方々にも感謝感激。
- 高齢化していく教会共同体の努力とその方法（家庭訪問など）をお聞きして参考になりました。

- 「出向いていく教会」「人を探しに出る教会」「聖霊に動かされる教会」「カ障連のとりくみ 豊かな共同体を育むこと」など様々なメッセージから勇気と力をいただきました。
- 行って、あなたもそうしなさい。と言われたことが励ましに、祭司・レビ人に対する考察が新たになった。
- 教区によって御ミサの開催の是非の違いがあり、またその方法の違いもいろいろあったことに驚いた。コロナによってよくなったこと、悪くなったこと様々あるけれどそれを糧にして心豊かにできるように努力していきたいと思う。
- 準備大変だったでしょう。とても信仰への気持ちが伝わりました。喜びがありました。ありがとうございました。
- 私は、私たちは何ができるだろうか。その知恵を。主イエス・キリストの愛に満たされているはずの教会の中でも障害者の痛みや不安や苦悩にもっと寄り添ってほしい、声をかけてほしいという孤立感や疎外感を持っている当事者の方や家族の方々がおられることを知った。
- 自分だけが特別な体験をしたのではなく、皆各一人一人が神様から特別に賜を授かり、特別に可愛がって頂いているのだ、と改めて知ることが出来ました。
- サマリア人のようになれない自分が作る壁について、教会社会がしてくれないのではなく自分から発信すること。イエスは「行って、そうしなさい」の一言です。
- 精神病患者は差別される。
- 何のために分科会の音声を残したいのだろうか。記録優先のようで少し不愉快です。「ここだけの分かち合い」としてそっとしたほうが良いのでは。

- 分科会で多くのことを学びました。各地から来られた方々と膝を交えて話し合いました。楽しかったです。ただやはり気になるのは質疑応答で、カトリック教会内で障害者の方に傲慢な言動、態度をとる人がいると発言されたことです。そのような態度をされる方が心開かれますように。
- 「イエス様は必ず自分の眼を直してください」強い強い信念・信仰を見習いたいと思った。
- 差別について 被害者・加害者について 救らいの意識からなかなか抜けきれない自分を見つめています。今回の大会、とても心のこもった準備・対応に感謝しています。素晴らしい空気で心が洗われた2日間でした。
- 差別の生きづらさを感じる一つの典型がハンセン病で、その差別の問題が共通項で社会モデルを目指していけばいいと思っています。参加者からのいろいろな話が聞けて良かったです。救らいでは救われないが身に沁みました。ともに歩む教会として、障害ある仲間と積極的に対話し、どういう福音的配慮が必要かを明らかにしていくことが、今のカ障連にも求められていることではなかろうか。

れんらくさきおよ にゆうかい もう こ さき
連絡先及びご入会の申し込み先

じ む きょく な ご や し しょうわくえほうちよう
事務局：〒466-0037 名古屋市昭和区恵方町2-15
な ご きやうく ふくしいんかいしつない
名古屋教区カリタス福祉委員会室内
にほん しょうがいしゃれんらくきやうぎかい
日本カトリック障害者連絡協議会
Tel：052-852-1426 Fax：052-852-1422

ゆうびんきょくふりかえこうざ ばんごう
郵便局振替口座番号：00100-7-31254

どうふう ふりこみようし づりよう
(同封の振込用紙をご利用ください)

かい ひ ねんかん くち えん
会 費：年間1口 1,000円
(団体 10口以上 個人 1口以上)

かにゆうしゃめい にほん しょうがいしゃれんらくきやうぎかい
加入者名：日本カトリック障害者連絡協議会